

令和 6 年度
高等教育推進センター
活動報告書

目 次

1	設置の経緯・目的	3
2	組織	3
3	会議体	3
4	構成員	4
	(1) 高等教育推進センター	4
	(2) 教育開発部門	4
	(3) FD・SD 部門	4
	(4) 教学 IR 部門	4
	(5) 高大連携・初年次教育部門	5
5	主な活動成果	5
	(1) 領域横断型プログラム※「ADEPT プログラム (AI Data Science Education Program for Tomorrow)」(文部科学省 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度リテラシーレベル認定)の履修者数・修了者数の増加 [教育開発部門]	5
	(2) データサイエンス学部「データサイエンス人材育成プログラム」(文部科学省 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度応用基礎レベルプラス選定)の履修者数・修了者数の増加 [教育開発部門]	5
	(3) 国際商学部「データサイエンス人材育成プログラム」の設置 [教育開発部門]	6
	(4) 留学しやすい環境の整備 [教育開発部門]	6
	(5) グローバル教育方針策定	6
	(6) ヨコハマ FD 連絡協議会の開催 [FD・SD 部門]	6
	(7) 教学 IR と連動した FD・SD 研修会の実施 [FD・SD 部門／教学 IR 部門]	6
	(8) FD 活動・教学 IR 活動への学生参画 [FD・SD 部門／教学 IR 部門]	6
	(9) 全国学生調査の分析 [教学 IR 部門]	7
	(10) 高大連携事業の推進 [高大連携・初年次教育部門]	7
	(11) 「病気を科学する」オンライン単日受入実施	7
	(12) 金沢高校の「総合的な探究の時間」への本学学生派遣プログラム実施	8
6	資料集	8

1 設置の経緯・目的

横浜市立大学には、金沢八景キャンパスを中心に国際教養学部・国際商学部・理学部・データサイエンス学部があり、福浦キャンパスには医学部がある。教育の質保証のため、それぞれに教学 IR や FD・SD 等の教育に関連する委員会で議論し、必要な改善を行ってきた。しかしながら、教育内容が複雑化し、社会から要求される内容が高度化、多様化するにあたっては、大学として一貫性のある戦略をもって速やかに対応する必要がある。「新たな社会の創造をリードする大学」として教育の質を保証する機構、併せて教育改革を推進する全学横断的な組織として令和4年4月に「高等教育推進センター」を設置した。

2 組織

高等教育推進センターには、4つの部門を設置している。

(1) 教育開発部門

(※教育開発部門の中に、データ思考教育班とグローバル教育班を設置)

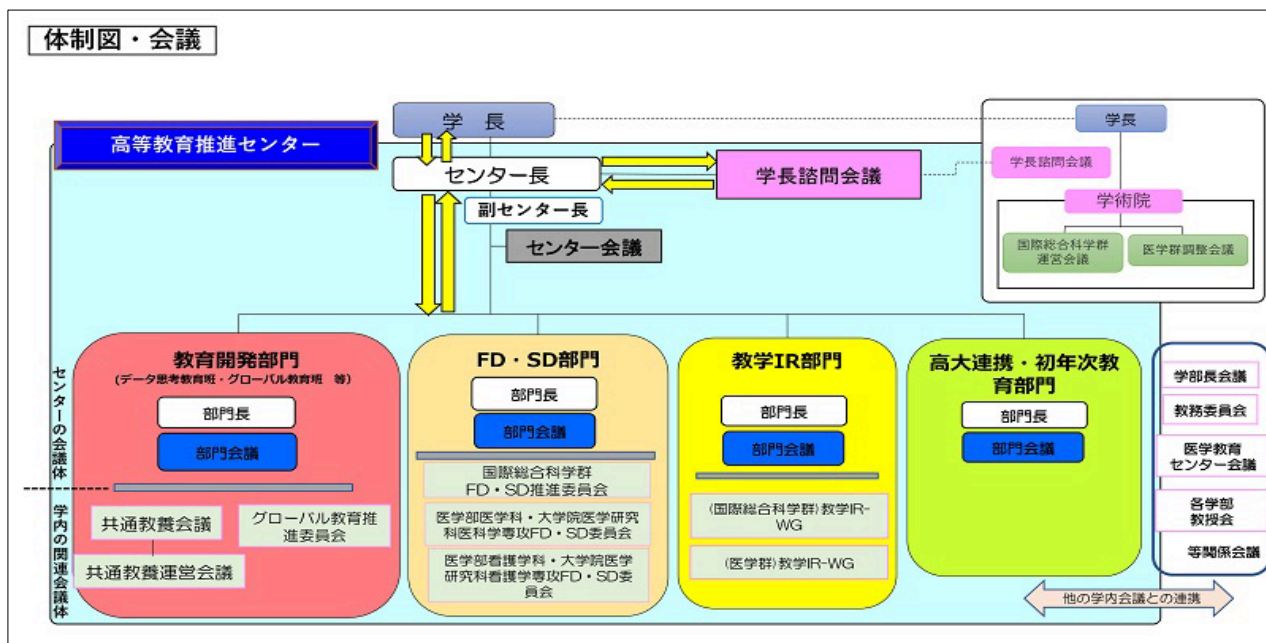
(2) FD・SD 部門

(3) 教学 IR 部門

(4) 高大連携・初年次教育部門

3 会議体

高等教育推進センターに高等教育推進センター会議と各部門に部門会議を置いた。また、既存の学内委員会との連携の上でセンターの運営を行っている。



4 構成員

(1) 高等教育推進センター

氏名	役職
石川 義弘	高等教育推進センター長
橘 勝	副センター長／教育開発部門長
寺内 康夫	副センター長
小林 謙一	副センター長
佐藤 友美	FD・SD 部門長
土屋 隆裕	教学 IR 部門長
本多 尚	高大連携・初年次教育部門長
菊池 芳明	大学専門職（教育推進課）
出光 直樹	大学専門職（アドミッション課）

(2) 教育開発部門

氏名	役職
橘 勝	教育開発部門長
寺内 康夫	副センター長
小林 謙一	副センター長
高橋 秀尚	副共通教養長
山崎 眞見	データ思考教育班長
大澤 正俊	グローバル教育班長
菊池 芳明	大学専門職（教育推進課）
出光 直樹	大学専門職（アドミッション課）

(3) FD・SD 部門

氏名	役職
佐藤 友美	FD・SD 部門長
飯田 洋	医学教育学 講師
山田 典子	精神看護学 教授
菊池 芳明	大学専門職（教育推進課）
出光 直樹	大学専門職（アドミッション課）

(4) 教学 IR 部門

氏名	役職
土屋 隆裕	教学 IR 部門長
藤田 浩司	臨床研修センター 講師
有本 梓	地域看護学 教授
出光 直樹	大学専門職（アドミッション課）

(5) 高大連携・初年次教育部門

氏名	役職
本多 尚	高大連携・初年次教育部門長
鈴木 伸治	国際教養学部長
和田 淳一郎	国際商学部長
佐藤 友美	理学部長
山崎 眞見	データサイエンス学部長
中島 淳	医学群長／医学部長
赤瀬 智子	医学部看護学科長
出光 直樹	大学専門職（アドミッション課）

5 主な活動成果

(1) 領域横断型プログラム※「ADEPT プログラム (AI Data Science Education Program for Tomorrow)」(文部科学省 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度リテラシーレベル認定) の履修者数・修了者数の増加 [教育開発部門]

ADEPT プログラムは、令和 7 年度以降は全学部生の 50%以上が履修することを目標として文部科学省へ申請をしている。プログラム設置以降、各学部において 4 月に開催する領域横断型プログラム説明会にて履修の勧奨を行った。また、令和 6 年度から修了申請を省略し、学生の手続きを簡略化することで、参加申請が完了して、必要な科目の履修が完了している学生は全員、本プログラムの修了を認定することができるようになった。

その結果、令和 6 年度は全学部生の 36%の履修率（在学生のうち履修者（修了者含む）の収容定員に対する割合）を目標としていたが、令和 6 年度末時点で、目標を超える 49.1%の履修となった。【令和 4 年度 履修者 1,205 名(履修率 31.9%) → 令和 5 年度 履修者 1,419 名(履修率 37.5%) → 令和 6 年度 履修者 1,858 名(履修率 49.1%)】

※ 領域横断型プログラム：本学では学生に当該分野の専門知識、体系だった知識を身に付けさせることと、学修成果の見える化を目的として、領域横断型プログラムを設置しています。各学部の専門分野における特徴的な科目群を設定し、その科目群で指定された科目を履修し、その後プログラムで定められた条件を満たすことによって、大学として修了証を発行します。詳細は[こちら（本学ウェブサイト）](#)

(2) データサイエンス学部「データサイエンス人材育成プログラム」(文部科学省 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度応用基礎レベルプラス選定) の履修者数・修了者数の増加 [教育開発部門]

データサイエンス学部の学生を対象とした「データサイエンス人材育成プログラム」の参加登録者数は前年度 109 名に対し、98 名であった。数字の減少は、前年度までに多くの上級生が登録を完了したことにより、上級生の登録者数が減少したことによるものである。1 年生に限ってみれば、入学者 67 名全員が参加登録を実施した。修了者数についても前年度 11 名から 52 名に増加した。

(3) 国際商学部「データサイエンス人材育成プログラム」の設置 [教育開発部門]

令和5年度から、国際商学部において「データサイエンス人材育成プログラム」を開始し、令和6年度に文部科学省に申請し、数理・データサイエンス・AI教育プログラム応用基礎レベルの認定を受けた。令和6年度の履修状況は、収容定員(1,040名)に対して56%(581名)、修了者数は114名であった。

(4) 留学しやすい環境の整備 [教育開発部門]

交換留学での単位互換のため海外留学科目の増設や、第2クォータープログラム参加時の付与単位数の拡充など留学しやすい環境を整備した。また、交換留学派遣学生を対象とした留学支援制度に申請し採択された。これにより派遣交換留学生に毎月奨学金を支給できるようになった。

(5) グローバル教育方針策定

新学長を迎え、全学部・研究科会議にて意見聴取を行い第4期中期計画におけるグローバル教育方針を策定した。今後は、本方針に基づき大学の国際化を進めて行く。

(6) ヨコハマ FD 連絡協議会の開催 [FD・SD 部門]

ヨコハマ FD フォーラムは、4大学間(横浜市立大学・神奈川大学・関東学院大学・横浜国立大学)で締結した「FD活動の連携に関する包括協定」に基づいて、毎年実施している。令和6年度は関東学院大学が幹事校となって、広く一般に公開する「フォーラム」形式から、関係者のみで行う「連絡協議会」とすることとなり、2024年12月21日に「2024年度ヨコハマ FD 連絡協議会」が開催された。「授業評価-意義ある実践とFDへの接続に向けて-」をテーマに実施され、外部講師1名・横浜4大学の教職員35名・学生8名が参加し、主に授業アンケートに関する各大学の事例や課題について議論を行った。

(7) 教学 IR と連動した FD・SD 研修会の実施 [FD・SD 部門／教学 IR 部門]

教学 IR 部門と連動し、FD・SD 研修会「学生アンケートの活用」(国総群)および「なぜ医学部に教学 IR が必要なのか」(医学群)を企画実施した。「学生アンケートの活用」では、学生アンケート結果の概要に加え、従来十分に検討されてこなかった課題についても専門的見地から指摘がなされた。教学 IR の活用における課題と可能性をバランスよく扱った内容であり、今後の教学改善に資する優れた講演であった。「なぜ医学部に教学 IR が必要なのか」では、大阪公立大学医学部 IR 室における実践事例を交えた講演が行われた。調査と実効性のあるフィードバックの結果、学生がアンケートに回答することを当然と捉えるようになり、教員も自身の担当科目について IR 室に解析を依頼するなど、IR が学内に深く浸透している状況が紹介された。IR の定着に向けた具体的な取組とその成果は、今後の参考となる内容であった。

(8) FD 活動・教学 IR 活動への学生参画 [FD・SD 部門／教学 IR 部門]

FD 活動及び教学 IR 活動に学生の意見を反映させ、実態に沿った取組を進めるために FD 活動・教学 IR 活動への学生参画を開始した。

FD 活動に関しては、国際総合科学群では学生参加型 FD・SD 研修会を2回開催した。1回目の FD・SD 研修会では、大学についての意見を広く収集し、その内容を踏まえて第2回の FD 研修会のテーマとした。2回目の研修会では、1回目の研修に参加した学生を中心にファシリテータ

一を担当させ、より深いディスカッションを行った。令和7年度に向けて、学生スタッフを募るための募集概要を作成し、FD・SD推進委員会で議論した。また、医学科では、引き続き医学教育推進センターの各部門会議で学年代表に出席してもらい、学生からの意見を収集した。看護学科では、2023年10月に実施した教育に関する学生アンケートに対する返答として、「学生参加型授業改善プロジェクト 学生と教員でつくる未来の授業」をテーマとしたFD・SD研修会を実施した。

教学IR活動に関しては、文部科学省実施の「全国学生調査」を題材に、学生視点での分析を行い、高等教育推進センターや学内会議で学生の分析結果をフィードバック・議論した。

(9) 全国学生調査の分析 [教学IR部門]

今年度は令和6年度調査結果※の本学調査結果の集計・分析を行い、前回調査で全学的な課題として挙げた項目について、確認を行った。

前回、令和4年度調査において大学での経験や知識・能力の獲得に関する項目で、大学平均が全国平均を下回った項目は以下の4項目であった。

課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される。(R6平均:2.5、R4平均:2.5)

ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある。(R6平均:2.4、R4平均:2.4)

インターンシップ(5日間以上)(R6平均:3.4、R4平均:3.1)

将来の仕事につながるような知識・技能(R6平均:3.1、R4平均:3.0)

※ 令和6年度調査の回答率は全体で47%(本調査に参加した大学全体(540大学)の回答率は11%)

また、令和6年度調査では、教学IR学生プロジェクト※で設定した本学独自設問について、学生視点での分析と結果報告を行った。

※ 教学IRへの学生参画として、令和5年度から有志の学生によって、全国学生調査の分析を行い、報告会を実施している。

(10) 高大連携事業の推進 [高大連携・初年次教育部門]

本学は横浜市教育委員会、神奈川県教育委員会と教育連携協定を締結し、県内の高校と連携事業を推進している。特に、横浜市教育委員会との連携においては、横浜市立金沢高等学校、横浜市立横浜商業高等学校、横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校を重点校に位置づけ、高大連携事業を展開してきた。令和6年度は例年実施している教員を派遣しての模擬講義や生徒の発表に対する講評、大学での授業見学・研究室見学の受入に加え、横浜市立高校教員の教育力向上を目的とした「教員研修」の令和7年度実施に向けての調整、オンラインを活用した新規高校生受入プログラムの実施、本学学生の高校への派遣プログラムの実施を進めた。

(11) 「病気を科学する」オンライン単日受入実施

令和6年度より高大連携事業の新規プログラムを立ち上げ、共通教養科目「病気を科学する」の授業をオンライン単日プログラムとして高校生の受け入れを実施した。参加生徒数は、横浜市立高校2校、神奈川県立高校3校、私立高校3校から延べ56名であった。オンライン開講により、高校からの移動時間を考慮する必要がなく参加しやすかったことから、近隣の高校だけでなく、遠方(市内北部や相模原市)の高校からも参加があった。

(12) 金沢高校の「総合的な探究の時間」への本学学生派遣プログラム実施

令和6年度より金沢高校2年生の「総合的な探究の時間」での個人の探究活動に対して、本学学生を派遣する高大連携事業を新規に実施した。2日間で学部生、大学院生合わせ延べ42名の学生が参加し、大学での学びを地域の高校性へ還元するサービスラーニングとしての連携事業となった。参加した学生からは、「自分自身の学びに繋がった」、「高校生に探究活動についてアドバイスをすることで、自分の研究を見直す、大学での学びを振り返ることができる場となった」、「実際の学校教育現場を一部体感でき、(教職課程を履修している学生にとっても)具体的なイメージを持てる機会となった」といった感想が得られた。

6 資料集

- (1) 「ADEPT プログラム」申請及び修了状況報告
- (2) 「データサイエンス人材育成プログラム(応用基礎レベル)プラス」申請及び修了状況報告
- (3) 2024年度ヨコハマ4大学FD連絡協議会 開催報告
- (4) 令和6年度FD関連講演会等実績
- (5) 令和6年度教学IR実施報告書
- (6) 令和6年度高大連携実績